



石原 保先生を偲ぶ

本学会名誉会員石原保博士は平成 5 年 (1993) 3 月 10 日、松山市民病院で肺炎のため逝去されました。間もなく 75 才になられたところでした。

先生は大正 7 年 (1918) 4 月 28 日、静岡県でお生まれになり、広島県の呉一中 (現三津田高校) から広島高等学校を経て、東京帝国大学農学部に進まれ、昭和 16 年 12 月に卒業されました。しばらくそこで研究を続けられたのち、翌年 5 月、九州帝国大学農学部副手として、江崎梯三教授のもとで、農林省委託浮塵子駆除予防試験に従事されました。昭和 20 (1945) 年、同年 4 月に松山に新設されたばかりの愛媛県立農林専門学校講師として着任、翌年 2 月には教授になりました。その後、専門学校が大学に昇格し、ついで国立移管により愛媛大学農学部となりましたが、退官されるまでの 40 年間にわたって、一貫して昆虫学研究室の充実、発展に努められました。

先生は昭和 14 年 (1939) に本学会に入会されて以来、昭和 27~49 年及び昭和 52~55 年に評議員、昭和 48~57 年に自然保護委員、昭和 58・59 年に会長を務められました。その間、第 13 回 (昭和 28 年) 及び第 32 回 (昭和 47 年) 大会を松山で開催し、大会委員長を果されるなど、本学会の発展にも尽力され、昭和 63 年 10 月の総会で名誉会員に推されました。

このほか学会関係では、日本応用動物昆虫学会、動物分類学会の評議員、日本野鳥の会の理事や名誉会員でもありました。

先生は研究面では、半翅目、ことに同翅亜目の系統分類学をライフワークとされ、多くの業績を残されました。九大では江崎教授のもとで日本列島産ウンカ科の分類学的研究に取り組み、昭和 24 (1949) 年には、その成果を学位論文としてまとめられました。その後ヨコバイ類の研究にも手を広げられ、西日本における稲萎縮病のウイルス媒介昆虫としてのツマグロヨコバイ類、北海道の馬鈴薯天狗巣病、沖縄の甘藷天狗巣病などのウイルス媒介昆虫としてのヨコバイ類が問題となるや、速やかに対応してその分類を確立されるなど、つねに応用昆虫学また害虫防除技術開発に多大の貢

献をされました。先生は日頃から応用昆虫学こそ分類学的基礎が重要であることを説かれ、昭和32年に出版された「系統農業昆虫学」は、そのことを明確に示されたものといえます。さらに、それらの成果をもとに日米セミナーや東南アジア地域における稲作害虫の研究指導でも活躍されました。

先生が終戦直後の混乱期に、松山のような田舎の新設校に赴任されるについては、昆虫学的にはほとんど未開ともいえる四国の地によほど惹かれるものがあったように思われます。四国の昆虫相の解明と、昆虫学の普及発展を目的とし、昭和24年に四国昆虫学会を設立され、翌年には機関誌「四国昆虫学会会報」を創刊されました。また、本学会中国・四国支部から四国支部を分離独立させることに尽力され（昭和26年）、第13回大会を松山に招致して、四国の昆虫研究者に大きい刺激を与えられました。一方、四国产の確実なデータをもつ昆虫標本の収集保存の必要性を説かれ、学生とともに採集と標本作製に精力的に取り組まれて、現在の昆虫標本室のコレクションの基礎を造られました。そして、当研究室を日本における昆虫分類学研究の一拠点にすることを目指してこられました。先生はあるとき、「もし四国の虫に引かれて松山へ来ることがなかったら、私自身の人生も現在とは全く違ったものになっていたであろう。しかし四国の虫に引かれ、また引き止められて松山にいることは決して悪くなかったし、悪くないと信じている」と、述懐されています。研究面で世界的な業績を挙げられながら、一方では、ご自身の終焉の地とされた四国の昆虫研究の発展に情熱を注がれ、一生を捧げられたと思います。

幼少の頃からいろいろな生物に関心をもたれ、採集や飼育に親しまれたようで、鳥や植物についての造詣も深く、その方の著作も数多く書いておられます。「松喰虫防除法」に強く反対されたのは、幼時から愛し、親しまれた虫、鳥、花によってつくられる自然生態系が、空散によって破壊されることにナチュラルリストとして危惧の念を表明されたものと思われまます。

先生が松山に来られ、わたくしが昆虫学を専攻することを認められ、先生のそばで過ごさせて頂いてほぼ半世紀になります。もと農学校の暗い木造校舎の一室で、古い外国製の単眼顕微鏡を覗きながら、ウンカの交尾器の図を描いておられた、若々しい先生の姿を鮮かに想い起こすことができます。ほんとうに何もなかった時代から、よくここまで研究室を育て上げられ、亡くなる直前まで研究室の将来を気遣っておられたことに、今さらのように驚異と敬意を感じずにはおれません。何事にも真摯で、一途に対処された先生の生き様は、わたくしたち薫陶をうけたものはもちろん、先生に接した多くの人に感銘を与えたに違いありません。心から先生のご冥福をお祈り申し上げます。

略 歴

大正 7 (1918) 年 4 月 28 日	静岡県に生まる
昭和 16 (1941) 年 12 月	東京帝国大学農学部農学科卒業
昭和 17 (1942) 年 5 月	九州帝国大学農学部副手
昭和 20 (1945) 年 10 月	愛媛県立農林専門学校講師
昭和 21 (1946) 年 2 月	同校教授
昭和 24 (1949) 年 6 月	愛媛県立松山農科大学助教授
昭和 24 (1949) 年 10 月	農学博士 (九州大学)
昭和 27 (1952) 年 10 月	同大学教授
昭和 30 (1955) 年 7 月	愛媛大学農学部教授
昭和 58 (1983) 年 1 月	日本昆虫学会長 (一期 2 年)
昭和 59 (1984) 年 4 月	愛媛大学を停年により退職、愛媛大学名誉教授
昭和 61 (1986) 年 1 月	日本野鳥の会名誉会員
昭和 63 (1988) 年 10 月	日本昆虫学会名誉会員
平成 2 (1990) 年 6 月	環境庁長官表彰
平成 3 (1991) 年 11 月	勲 3 等旭日中綬章
平成 5 (1993) 年 3 月 10 日	逝去, 74 才, 正四位に叙される

(愛媛大学農学部 宮武睦夫)